

# 学生の音楽志向からみた「音楽のよろこび」

宮 島 幸 子

「音楽のよろこび」の授業において、13回にわたって「私の好きな音楽」発表を実施した。各人が好きな曲について紹介し、また他の学生の好きな曲を聞き、曲の感想を述べることで、同世代の音楽志向、観賞の仕方、関心事の情報交換ができたと考えられる。自分の好きな曲を紹介する「よろこび」、みんなでともに聴く「よろこび」をこの授業で体験することにより「音楽のよろこび」に繋がったと考えられるので報告する。

キーワード：J-ポップ 音楽志向 音楽のよろこび 自己表現

## 1. はじめに

京都文教短期大学において、「音楽のよろこび」を担当している。人間生活にかかわる領域として「音楽のよろこび」は総合教養科目の中の「文化と芸術」という領域の中にある。授業の概要・目標は「音楽とは音を感じ取ることのよろこびであり、音楽のよろこびは感動です。音楽の歴史は極めて古く、社会や生活と深く関わりながら、世界中の国々で独自の音楽文化が生まれてきました。一方、今ではマス・メディアによりいつでも、どこでも、どんなジャンルの音楽も簡単に聞くことができるようになり、音楽はグローバル化してきています。音楽を『聴く』『奏でる』また『創る』ことを通じて音楽を身近に感じ、『音楽するよろこび』を体験しながら、今一度、音楽の存在を考えてゆきたい」ことにある。

音楽への関わり方を身近なところから始めたいと思い、授業で「私の好きな音楽」というコーナーを設け、毎回、授業の始めに4人から6人の学生に発表をしてもらった。聴衆の学生に

は発表した曲について感想を提出してもらい、まとめた感想をそれぞれの発表者に返していく方法で行った。その後発表者には「何故、この曲を紹介したのか」レポートを提出してもらった。

## 2. 「音楽のよろこび」とはなにか

第1回の講義の始めに「音楽のよろこび」を受講する学生に「あなたにとって音楽とはどのような存在ですか」という質問をした。形式は自由記述式で行った。集約の方法は、それぞれの記述を数項目の箇条書きにまとめ、他の回答者の回答も合わせて内容的に同一のものを集めて代表する言葉で置き換えた。その結果、表1にみるように16項目に分けることができた。「なくてはならないもの」と答えた学生は34%で、音楽がない世界は考えられないというコメントもあり、10代後半から20代始めの若者の日常生活の中に占める音楽の存在の大きさをうかがい知ることができる。

現代社会のなかではオーディオ技術も発達し、音楽は特に若者の生活行動の中に広く深く

表 1 音楽の存在意義 (複数回答)

項 目	頻度	%
なくてはならないもの	22	34
癒し	15	23
楽しみ	15	23
鼓舞する	12	19
気分転換	11	17
リラックス	10	16
身近にある	8	13
演奏する	7	11
何かを与えてくれる	4	6
素直な気持ちになる	4	6
潤い	3	5
コミュニケーション	3	5
仕事での関わり	2	3
踊る	1	2
自己表現	1	2
雰囲気に入る	1	2

学生数=64名

浸透し、なんらかの音楽が常に何処に居てもどこからか、絶えず限なく流れ、聴くともなく聴かないともなく無意識に音楽という渦の中に埋もれて生活している。このような状況は「あなたにとって音楽とは」の回答に「自然に耳に入ってきて、楽しかったり、落ち着いたりして感じるもの」「日常的なもの」「日常気付けばどこにでもあるもの」「身近なもの」「常に身近にあって何気なく自分の気持ちにいろいろな影響をあたえてくれるもの」「BGM的な存在」と生まれながらにしてこのような状況に身をおいている学生達の音楽に対する意識は、音楽の存在は非常に身近で、あるのが当たり前の存在であり、同時に「なくてはならないもの」として位置付けられていると考えられる。

また、「癒されるもの」「楽しむもの」23%，

「なにかを与えてくれるもの」「心を落ち着かせてくれるもの」「鼓舞する」「リラックスすることができるもの」「素直な気持ちにしてくれるもの」「やさしくなれるもの」「心を潤わしてくれるもの」「自分と外の世界を繋いでくれるもの」「コミュニケーションの一つ」「人の感情と同じようにいろいろ表現できるもの」「気持ちを豊かにしてくれるもの」と、自分の気持ちをストレートに表現してくれ、そして代わりに歌ってくれるようなものであり、また共感できることによって情緒面、精神面に働きかけてくれる自己表現の場として「なくてはならないもの」の要になっていると考えられる。

以上のことから、学生は音楽が持つ価値として自己のそして他者の心を動かすことができる力がある事を見出していると言える。

それでは、どのような音楽が学生の心を捉え「なくてはならないもの」になっているのだろうか。

### 3. 音楽志向

64名の学生が発表した「私の好きな音楽」を表2にまとめた。

J-ポップが56名、ミュージカル1名、映画サウンド・トラック1名、他6名であった。これほどまでにJ-ポップは学生の心を捕らえるのだろうか。烏賀陽弘道氏はJ-ポップについて、次のように述べている<sup>1)</sup>。

・・・「J-ポップ」は1988年末ころ音楽産業がマーケティングのためにつくった造語である。発端はある民放FM局がJ-WAVEという番組を制作した。その番組は洋楽しか流さず、曲間にはネイティブな流暢な英語の語りが流れるものであった。そのJ-WAVEで邦楽を流したいというレコード会社の邦楽宣伝担当者とJ-WAVE

表 2 学生の好きな曲

曲 名	artist	曲 名	artist
以心伝心	19	My Love	West Life
蝶々結び	aiko	Feel my soul	YUI
アスパラ	aiko	JOY	YUKI
ビードロの夜	aiko	ループ&ループ	アジア・カンフー・ジェネレーション
等身大のラブソング	Aqua Times	花	オレンジレンジ
He Wasn't	Avril Lavigne	そばにいて	ケツメイシ
Anywhere for You	Back street boys	大樹の影	コブクロ
5 more minutes	Bonnie Pink	Over Drive	ジュリ&マリ
Catch the wave	DefTech	全力少年	スキマスイッチ
何度でも	Dreams Come True	かえで	スピッツ
Only time	Enya	Cut my way	ユーホリア
song for you	EXILE	栄光の掛け橋	ゆず
Carry On	EXILE	3月9日(さんがつここのか)	レミオロメン
ただ逢いたくて	EXILE	春雨	ロードオブメジャー
We will ~あの場所で~	EXILE	ひまわり	阿室奈美恵
もし君が泣くならば	Going Steady	First Love	宇多田ひかる
Song for	HY	パイレーツ・カリビアン	映画サントラ
NAO	HY	美女と野獣メドレー	劇団四季
絆	KAT-TUN	NRain (レイン)	倅田来未
Story	Kelly Rawland	千の言葉	倅田来未
愛のかたまり	KinKi Kids	FEEL	倅田来未
音色	KREVA	Party	倅田来未
Eternal love	MEGARYU	Wind	倅田来未
夜空に咲く花	MEGARYU	You	倅田来未
T.T.T.	MINMI	純恋歌	湘南乃風
FRIENDS	MINMI	522 ページ	川嶋あい
真珠のなみだ	MINMI	プラネタリウム	大塚愛
South Orange	MINMI	丸の内サディスティック	椎名林檎
Everything	Mr.Children	透明人間	東京事変
DILLEMMA	Nelly	HEAVEN	浜崎あゆみ
Is you	Nelly	Voyage	浜崎あゆみ
Tower	Salyu	リルラリルハ	木村カエラ
Dear Woman	SMAP		

の編成担当者で議論された。前述のようにJ-WAVEは世界の音楽が一堂に会するオリンピックであり、J-ポップはその晴れ舞台で活躍する日本の音楽、というファンタジーを帯びていた。Jリーグにも国際舞台として「ワールド・カップ」があり、Jリーグはそこで活躍する日本のサッカーである。

・・・かくして「J-ポップ」は誕生の瞬間から遺伝子を受け継ぐことになった。これは「日本の土俗的な要素と決別し、洋楽に限りなく近づけた音楽」である。実は欧米で珍しがら

れる日本音楽といえ、尺八や琴、あるいは東洋音階によるメロディだったりするのだが、そうした伝統的な要素は切り捨てられた。なぜなら「J-ポップ」のファンタジーは「日本人が国際的、あるいは西洋的だと思っているもの」だからである。歌謡曲時代は重要なジャンルだった演歌がJ-ポップという範疇から切り捨てられ、衰退するのを見れば、それは明らかだ。・・・

以上のような音楽産業の目論見どおり、学生の「好きな音楽」は上記で示したように、英

語・ローマ字・カタカナで書かれた曲名が54.2%，歌手が69.0%を占めている。また，選曲理由に「日本人の歌う英語が好きで，英語の歌詞を含むものが好きである」と日本語の響きの美しさや語調のリズム感などではないようである。

このような現象は，強く時代精神性を映し出しているとおもわれる。

#### 4. 「私の好きな音楽」は「音楽のよろこび」

「音楽のよろこび」の授業で「私の好きな音楽」発表は授業のテーマに沿った内容だと思いますか？という質問に対して，97%の学生が「はい」という回答であった。その理由として異口同音ではあるが「好きな音楽」は，すなわち「音楽のよろこび」に繋がるので授業のテーマに沿っているという回答が55%を占めた。

また，「身近にある音楽を題材にして考えるので，授業に入っていきやすかった」「普段聞いている音楽が一番身近に感じるから」とテレ

ビ・ラジオのスイッチを入れれば歌番組で，CMで，ドラマの主題歌として，J-ポップは日常的な音楽として親しまれていることが分かる。

「私の好きな音楽」を聴取した感想は述べ4172データになった。この感想をデータベースに登録し，これから，どのような表現で感想を述べているか，言葉とその回数を抽出して，グラフに示してみた。図1に見るように，歌詞が，声が，メロディが「好き」と表現したのが1070回あった。またこの他にも，その曲を聞くと「元気が出る」228回，「切ない」150回，「カッコいい」「落ち着く」「しっとり」「しんみり」「素直になれる」という感情表現で感想を述べている。また，表現を強調するために「めっちゃ」という言葉が132回使われていた。

学生は「私の好きな音楽」として曲のどのようなところから探し出してきて，またその曲の何処に魅力を感じているのか，享受していくのか，音楽的要素からみでみる。

図2にみるように「歌詞が好き」507，「声がいい」395，「メロディが好き」166，「ノリがよ

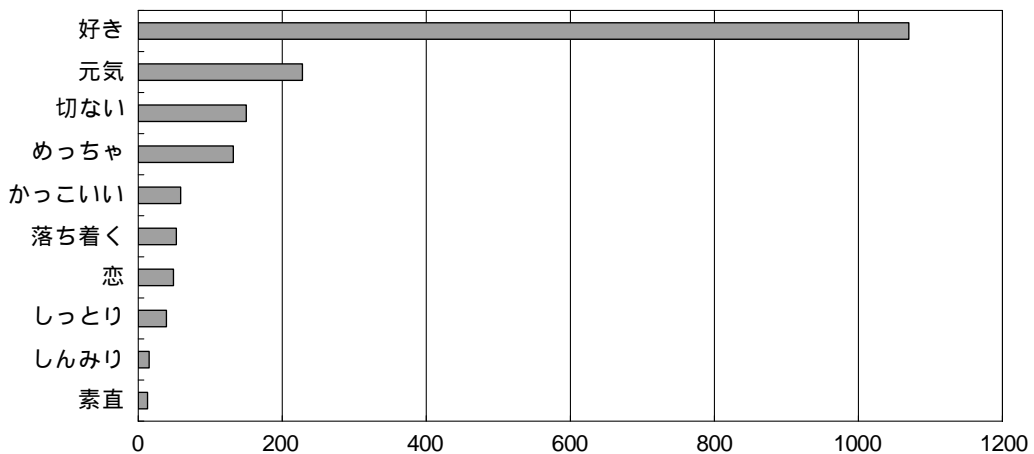


図1 発表曲に対する感想の言葉

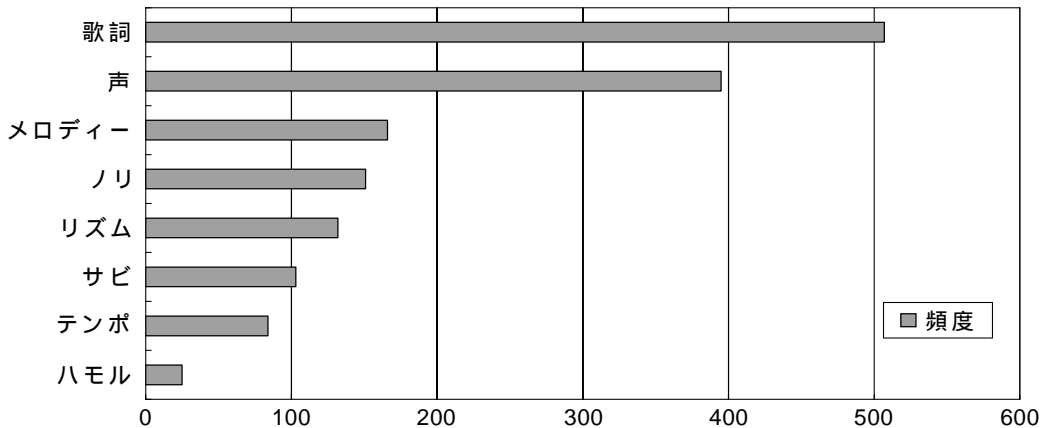


図2 発表曲に共感した音楽的要素

い」151,「リズムカルである」132,「サビの部分がとても好き」103,「テンポがよい」84,「ハモルところが好き」25と,その曲が好きになる動機として歌詞に共感していることがわかる。音楽を聴く前に歌詞を読むという学生も多いことが感想文から分かった。

このことから,自分の今の気持ちを語ってくれている,自分に代わって表現してくれている,今の心情と同じで共感できる,自分の今の気持ちを分かってくれている,そのような歌詞に先ず惹かれていることがわかる。

## 5. 音楽との出会い

烏賀陽弘道氏はテレビとヒット曲の関連性について,次のように述べている<sup>2)</sup>。

日本のポピュラー音楽産業が爆発的に成長した要因にはテレビの存在がある。テレビとの「タイアップ」というビジネスモデルが登場したことで,テレビがもたらす影響力は質・量とも変化した。ポピュラー音楽は「聴くもの」から「見て、感じて、聴くもの」に変化した。・・・J-ポップはドラマ主題歌,CMソ

グなどの「タイアップ曲」が多く、「テレビで流れた曲イコール売れた曲」と言う図式が定着している。

学生の感想文を分析するとこれを裏付けるように新しい音楽を知る機会としては,図3に見るようにテレビなどのドラマで流れている主題歌55回,友達といく「カラオケ」46回,友達から借りたプロモーションビデオ41回,コマーシャル・ソング35回,友達から借りたCD 24回などである。

上記のように,「友達」からの影響は大きく,「音楽」を媒体に個々のつながりを強める役割を果たしている。それだけ,音楽に関心があり,日常生活の中で話題性のある存在であることが分かる。

また,近年では音楽の配信サイトから音楽をダウンロードして楽しんでいる。2006年10月4日付けの記事<sup>3)</sup>によると,あるサイトからのダウンロードの7割が邦楽を選択している。ここでいう邦楽は洋楽に対する言葉であり,使用している年代が10代・20代であることからそのほとんどがJ-ポップであると考えられる。音楽は携帯電話・デジタルオーディオなどを用いて,

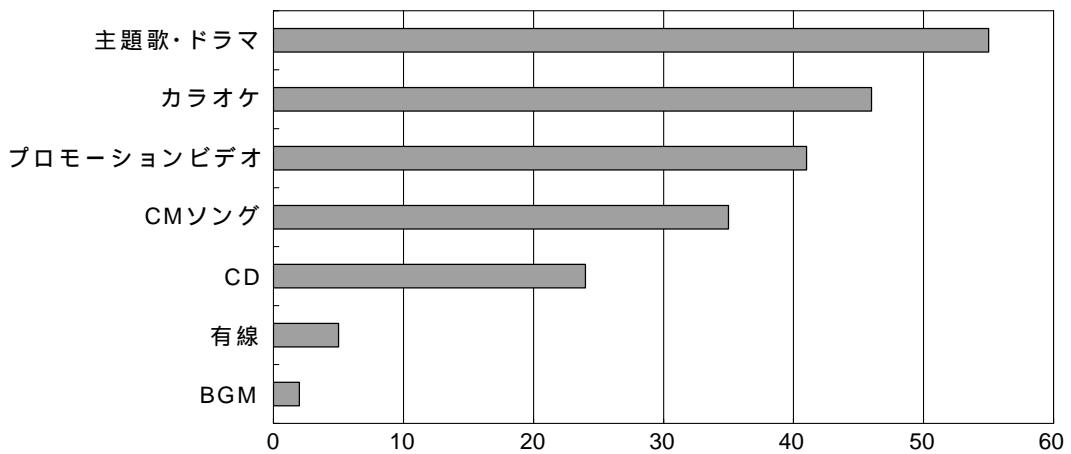


図3 発表曲を知った手段・機会

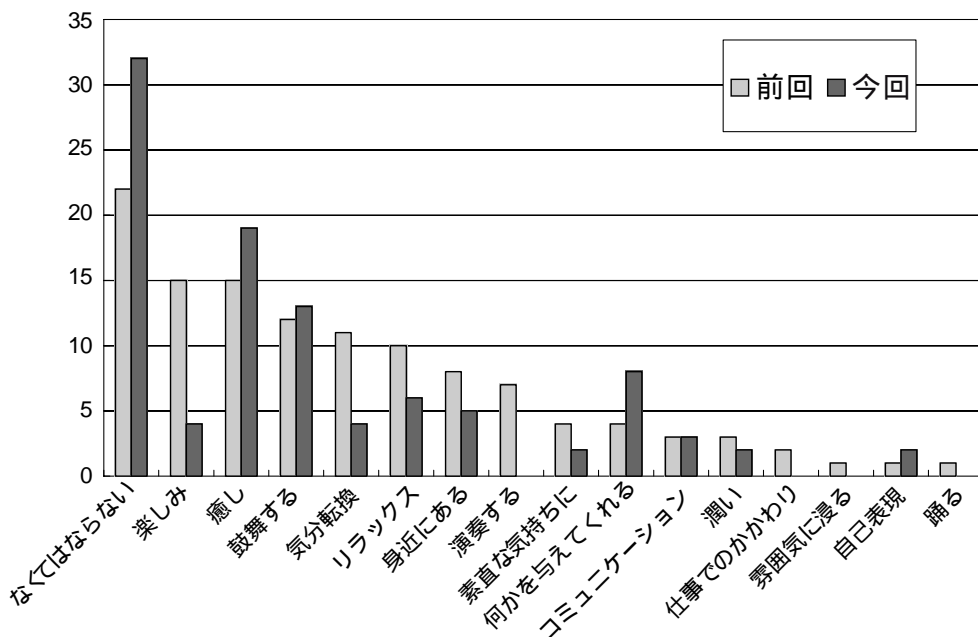


図4 音楽の意義についての比較

簡単に入手でき、持ち運びも容易になり、ますます手軽で身近なものになってきた。

15回目の授業でも1回目と同じ「あなたにとって音楽とはどのような存在ですか」という質

問をした。

集約方法は1回目で得た16項目に当てはめて分類し、それぞれの項目についての回答数の増減を比較した。

図4にみるように、音楽は「なくてはならないもの」と回答した人数が1回目比べて10人多くなり、次いで「癒し」「鼓舞する」「何かを与えてくれる」など、個人と音楽の関係において、音楽の直接的なアプローチを示す項目が増加した。反面、「楽しみ」「気分転換」「リラックス」「身近にある」など間接的な効果を示す言葉は減少した。

## 6. 考 察

「音楽のよろこび」の授業の中で13回にわたって「私の好きな音楽」発表を実施した。各人が好きな曲について紹介し、また他の学生の好きな曲を聞き、曲の感想を述べることで、同世代の音楽に対する好み、観賞の仕方、関心事の情報交換ができたことが、「音楽のよろこび」に繋がったと考えられる。

ふすま一枚で間仕切られていた日本の建築様式も西洋建築様式が取り入れられドアで間仕切られ、子ども達に個室が与えられるようになった。それにともない個室で一人で好きな音楽を聞くことができるようになった。また、移動する時もイヤホンで聞くことができる携帯オーディオも普及し、音楽は「みんなで楽しさを分かち合うもの」から「音楽は一人で聞くもの」と集団から個にと音楽行動も変容していった。

しかし、この授業の中で、自分の好きな音楽を発表するという形で、個人的な「思い」を他の人に伝え、また、その反応をフィードバックすることで、個人的な感情を相互に伝えることができた。この様にして個人的な枠の中に閉じこもっていた感情が、再び外に向かって開花し、集団の感情を高め調和させるという、音楽が本来もっているコミュニケーション力を醸成することが、この授業を通して出来たと考える。自

分の好きな曲を紹介する「よろこび」、みんなとともに聞く「よろこび」をこの授業で体験したと64名の学生は感想文中で述べている。

## 7. おわりに

「私の好きな音楽」発表時、また、レポートに「失恋した時に、この曲を聞くと、、、」「こんな恋がしたい、、、」などの選曲理由を述べている学生も多く見受けられる。青春期の人間らしい感情の機微があるがままに楽しむ生き方を垣間見ることができる。「好きな音楽」は精神活動の潤滑材としてゆるぎない部分をしめているのは確かである。

マス・メディアが発達し、手を伸ばせば、簡単に世界中の音楽を聞くことができる。今日では「ワールド・ミュージック」<sup>4)</sup>「世界音楽」<sup>5)</sup>という言葉も聞かれ、従来の西洋音楽を中心に「クラシック音楽」対「ポピュラー音楽」という二分法から、価値の序列化をしない「一つの音楽」として新たな視点で理解していこうという考え方の動きも出てきている。

諸民族で生まれた独自の音楽が融合して新しい音楽が生まれてきている。J-ポップも例外ではないであろう。このような文化現象の中、音楽は新しいサウンドの世界を創りだした。それにともない、音楽を「ボーダレス」「ジャンルレス」と言う概念で捉えてゆき、音楽の本質を探っていこうとしている。太古の昔、先人達は心から染み出る叫びを表現しようとしたものが音楽ではないだろうか。学生の心を揺さぶる「J-ポップ」は「音楽のよろこび」に通ずる感動を呼び起こす魂の響きそのものではなからうか。

「音楽のよろこび」の授業で、学生達の「私の好きな音楽」を取り入れた音楽観賞は、音楽

の持つ力が感性を育て、コミュニティの成員としての自覚を醸成し、人生を豊かなものにするための一助となりうると思われる。

#### 参考文献

- 1)「音楽のよろこび」講義概要2006：京都文教短期大学，2006
- 2) 烏賀陽弘道：Jポップとは何か，岩波書店，東京，2005.
- 3)「ナップスター 音楽配信スタート」：産経新聞 2006年10月4日付記事，8面
- 4) 地球の音を聞く ワールドミュージックCDカタログ：スーパードームスタジアム編，TBSブリタニカ，東京，1992.
- 5) 柘植元一，塚田健一編：はじめての世界音楽，音楽之友社，東京，2001.